様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０４３８９

研究課題名（和文）中東・北アフリカ地域におけるヘレニズム基盤の継承に関する都市文献史的研究

研究課題名（英文）A Literature Research on Urban History -Centering around the Succession of Hellenistic Foundations in the Middle East and North Africa

研究代表者
松原　康介（Matsubara, Kosuke）

筑波大学・システム情報系・准教授

研究者番号：００５４８０８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：ヒッポダモスの都市計画論と、その中東・北アフリカへの伝播の過程を概括した。ティパザを始めとするアルジェリアのヘレニズム基盤については、イッポーヌ、ジャミラの現地調査も踏まえて空間的特徴を整理した。レバノンのアンジャルについては文献調査からヘレニズムのみならずアラブ＝イスラーム独自の構成をとっていることがわかった。ソヴァジェ仮説については、ロス・バーンズによる著作（本研究で翻訳した）を参照しつつ、スークの多重化には商人によるDwelling Practiceが影響したことを明らかにした。最終年度にレバノン・シリアでの現地調査も実現し、番匠谷堯二によるダマスクス旧市街の再構築計画の再評価を目指す。

研究成果の学術的意義や社会的意義
3年間でヒッポダモスの計画論及び対象地域のヘレニズム基盤、都市通史に関する文献研究が進展したことで、ヘレニズム時代からイスラーム時代への都市空間の重層化の過程に関する解像度を高めることが出来た。また、アルジェリアのドゥジャミラ、イッポーヌといったローマ遺跡のヘレニズム基盤についての現地調査を行い、現代都市計画、観光政策上の位置付けも明らかにした。2023年には国連開発計画専門家としてアンジャル及びダマスクス、ハマーの現地調査を現地CPと協力し実施した。調査結果を本文献研究成果と組み合わせることで、都市空間の成り立ちをより具体的に明らかにするとともに、国際協力の推進に資することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：The urban planning theory of Hippodamus of Miletus and the process of its propagation to the Middle Eastern and North African cities were outlined. Regarding the Hellenistic infrastructures of Tipaza and other Algerian cities, I summarized their spatial characteristics based on the field survey in Hippone and D'Jamila. As for Anjar in Lebanon, the literature survey revealed that it is not only Hellenistic but also uniquely Arab-Islamic in composition. Regarding the Sauvaget hypothesis, we found that Dwelling Practice by merchants influenced the multiplicity of souks, referring to the work by Ross Burns (translated in this study). Field research in Lebanon and Syria was realized in the final year of the project, with the aim of re-evaluating the reconstitution plan of the Old City of Damascus by Gyoji Banshoya.

研究分野：中東・北アフリカ地域の建築・都市計画史

キーワード：ダマスクス　アンジャル　ティパザ　イスラーム　ヘレニズム　ヒッポダモス　都市空間の重層化　Dwelling Practice

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中東・北アフリカ地域（通称 MENA）には、数千年の歴史を持ち世界遺産としても知られる歴史都市が多く存在する。とりわけ、アレクサンドロス大王の東方遠征を契機として、グリッド・プランの創造と実践で知られたギリシャの都市計画が伝搬し東ローマにも引き継がれる中で、確固たる都市基盤が形成された。幅員の大きなカルド（南北軸）とデクマヌス（東西軸）を基軸とする明快なグリッド・プランと、神殿、広場、会議場、劇場、商店といった特徴的な施設の存在は、無居住化したいわゆる古代遺跡として存在するだけでなく、今日でも生きている歴史都市の基層として存在しているのである。多くは地下に埋もれているが、遺構として広場の一角を占めている事例や、主要街路として賑わっている事例等、その痕跡が今日の都市空間の重要要素となっているものも多くみられる。ここでは、同地域の歴史都市において今日でも活用されているギリシャ・ローマ型の都市計画の遺構を、ヘレニズム基盤と定義する。

明快で特徴豊かなヘレニズム基盤であったが、ローマ文明の衰退とともに徐々に変容を余儀なくされた。イスラーム世界においては、大規模神殿がモスクに転用される一方、広幅員の街路に狭小な店舗が形成され、幅員も狭くなると同時に、街路網も明快なグリッド型から袋小路のある複雑な街路へと、重層化・複雑化を遂げていった。考古学者ジャン・ソヴァジェは、具体例としてアルジェ、ベイルート、アレッポ、ダマスクスといった歴史都市をあげながら、変容のプロセスを仮説的に提唱している。トップダウン型の建設ではなく、住民自身の居住上の要請に基づいてなされた増改築によって、より小型の店舗からなる商店街（アラビア語でスーク）が徐々に形成されてきたプロセスが読み取れる。

本研究では、これをより建築的視点から概念化し、住民自身による「居住実践（Dwelling Practice）」と定義する。「居住実践」については、CIAM モロッコの近代建築運動を題材に、廉価住宅の躯体を与えられた離村住民がそれぞれの出身地の手法に応じて生活環境を（再）構築していく過程として明らかにしたトム・アヴァーマートらの研究がある。また、代表者も CIAM モロッコやアルジェのスラム事業を題材とする「居住実践」に関わる一定の業績がある（後述）。

すなわち、「ヘレニズム基盤の継承」とは、ギリシャ・ローマ以来の古代都市が、廃棄されることなく、居住実践による増改築等の空間改変を含みながらも住み続けられてきた、という意味での継承である。異なる原理に基づき重層的に構成されてきた都市空間の様相には、都市計画や文化財保全、観光といった多様な価値観の共生を目指す現代都市計画のための、希少で有用な知見が秘められているといえよう。

２．研究の目的

本研究では、都市内遺跡であるヘレニズム基盤の継承の様相を、住民自身による居住実践を中心にとらえ、（コロナ対応も念頭に）図面分析を中心とする文献調査（既往研究も含む）から明らかにすることを目的とする。対象は、ヘレニズム基盤が継承されていると仮説づけられるアルジェリア、レバノン、シリア、トルコの各都市と近傍の遺跡である（後述）。

学術的独自性として、建築・都市計画分野ならではの問題設定であることが挙げられる。ヘレニズム時代の遺産としては、パルミラやバールベック、ティパザ、エフェソス等が知られているが、これらは衰退後に都市として継承されなかった考古遺跡である。その研究は主として考古学分野においてなされており、膨大な蓄積がある。考古学研究においては単独の遺跡こそが最重要の研究対象である。一方で、都市内遺跡であるヘレニズム基盤は発掘の限界や活用による壊変の問題もあって、主題的な対象となりにくかったという事情がある。実際、例えばシリアでは、DGAM（Directorate-General of Antiquities & Museums：「考古総局」）が国内外の文化遺産保護を扱っているが、ここは考古学のみならず、建築、都市計画を専門とする技術者から構成されており、都市内遺跡であるヘレニズム基盤への対応は、考古学者よりも建築家、都市計画家によりなされている。本研究では、従来考古学分野では扱われてこなかった都市内遺跡を扱うことで、現在の都市空間整備の視点から位置づけを試みる点に独自性がある。

学術的創造性として、本応募課題に続く発展的な研究課題を導く点が挙げられる。文献研究を主たる方法とした本応募課題（3 年間）により、建築・都市計画史のみならず考古学分野や歴史学分野の膨大な先行研究を読み込み、研究の基礎を構築した上で、現地調査を伴う、より長期的かつ学際的な研究への接続を展望する、という意味での創造性である。文献研究は、コロナ対応からの要請でもあるが、後述のように代表者はこれまで収集してきた関連資料を膨大に所蔵している。コロナ対応を一つの機会とし、関連資料の精査を通じて将来の研究課題を導くことには時代的な創造性があると考えられる。

３．研究の方法

本研究では、以下の小テーマと実施スケジュールから段階的にアプローチする。現地調査は最小限に留め、文献研究を主に行う。日本語、英語、仏語、アラビア語文献を扱う。

(1)ミレトスのヒッポダモスの都市計画論（2021 年 4 月～9 月）
　伝説的なギリシャ都市計画の創始者「ミレトスのヒッポダモス」（前 5 世紀頃）に関する言説を整理し、本研究の出発点とする。正確な業績解明が目的ではなく、アリストテレスの『政治学』から、トマス・モアのユートピア都市計画論へと至る、ギリシャ・ローマ都市計画論に関わる西欧的言説の系譜を整理することで、ヘレニズム基盤の概念構築を行う。
(2)ギリシャ・ローマ遺跡の空間構成の地域特性の抽出（2021 年 10 月～2022 年 3 月）
　(1)を比較の参照系とし、ティパザ※、ジェミラ、ティムガッド（以上アルジェリア）、バールベック※、アンジャル（以上レバノン）、エフェソス※、ミレトス※、トロイ（以上トルコ）、パルミラ※（以上シリア）等のギリシャ・ローマ遺跡（※は代表者が訪問した経験を有する）について、既往研究における図面、歴史解説等を参考に、地域特性を整理する。例えば、アルジェリアとトルコでは、周辺環境の相違からくる農業施設や空間構成の変化が認められる。地域特性の把握により、ヘレニズム基盤の分析の前提情報が獲得される。
(3)イスラーム期の移行過程分析－アンジャルを事例に（2022 年 4 月～9 月）
　イスラーム期に徐々に進行した空間形成の概要を把握する上で、上記遺跡の一つであるレバノンのアンジャルは、イスラームの征服直後に、ローマの都市計画技術者・職人を動員して建設されたという点で重要な遺跡である。モスク等の施設はもとより、アーチの組み方がイスラーム風であるとされているが、空間構成にはローマ時代との共通性も認められる。これは住民の居住実践による継承とは質的に異なるが、いわばイスラーム的ローマ遺跡とも呼ぶべき事例であり、居住実践による変容との峻別と見極めの上で重要な示唆が得られる。
(4)ソヴァジェ仮説の検証に基づく考察（2022 年 10 月～2023 年 3 月）
　最も重要な小目的である。ヘレニズム基盤を継承し今日まで存続してきたアルジェ※、アンナバ（以上アルジェリア）、ベイルート※、ビブロス※（以上レバノン）、ダマスクス※、アレッポ※（以上シリア）を中心に、ソヴァジェが提起した居住実践に基づく空間変容の仮説を検証しつつ、空間変容の具体的な様相と、現在の都市空間における活用の実態を解明する。古地図分析（中東都市多層ベースマップシステム（後述）を用いる）、絵画、写真等の画像資料分析、及び文献資料、既往研究分析から、ヘレニズム基盤の継承のありかたを考察する。
(5)現代の都市計画、文化財保全等における位置づけの検討（2023 年 4 月～2024 年 3 月）
　例えばダマスクスでは、1968 年の都市計画において、ヘレニズム期の遺産とイスラーム時代の都市組織のいずれを重視した空間整備/保全を行うかの論争が起こり、国際協力機関の間でも意見が分かれた（後述）。都市計画論や文化財保全、観光まちづくりといった現代的観点から対象都市のレビューを行い、多様な価値観を内包する都市のありかたを考察する。

４．研究成果

　以下、上述の 5 段階に基づいて成果を概括する。

(1)ミレトスのヒッポダモスの都市計画論
　ヒッポダモスはもとより伝説的存在であり、その具体的な人物像・業績像は未だ不明点が多い。しかし、既往研究の整理から判明したことは以下のように概括できる。まず、紀元前 5 世紀頃に活動した人物であり、ロドス島、ピレウス（ペイライエウス）、ミレトス、トゥリオイ、等の諸都市で実際に都市計画を主導したとされることがある。主な根拠はアリストテレス『政治学』における言及である。しかし、ヒッポダモスは都市計画・建設の実務者というよりは、恐らく哲学者に近い人物であったとされる。また、ロドス島の都市計画がなされたとされる前 5 世紀末と、ミレトスの都市計画（再建）がなされた時期のいずれにもヒッポダモスが現役であったと考えることには無理がある。
　それでも、象徴的な意味でのヒッポダモス像に帰するとされる都市計画論としては、グリッド型の都市プラン、ゾーニングの導入、各地区の統合といった特徴が良く知られている。グリッド型都市プランは、実際には多様な地形に合わせて適応される必要があり、その点で天文・気象学者でもあったヒッポダモスは数学的に厳密な計画と調整を行ったとされる。具体的に知られているのはロドス、ピレウス、トゥリオイにおける実現と、空間的な共通性である。グリッド型市街地の中央には広場が置かれ、更に神殿やアゴラ、劇場、体育館、音楽堂等が配置される。更にインスラ（集合住宅の建つ住居区画）が市民身分に対応しつつ計画される。そうした全体の統合と体系化こそがヒッポダモスの都市計画の本領であるとされている。ギリシャの都市国家の政治的・軍事的転変、また植民活動が目まぐるしく進展する中で、都市計画が必要とされる機会は多く、それが地域的に広範囲に広がった理由である。
　なお、ヒッポダモスの都市計画は半ば伝説的な業績と言うべきであるが、ギリシャの都市計画は、更に古い都市文明である西アジア（オリエント）の影響を受けているという議論も注目に値する。たとえば、ネブカドネザル王はバビロンの再建で知られるが、これは天文学的に厳密な方位に沿って規則的に設計されていた。ギリシャとオリエントの交流は有史以前からあったとされる中、建築・都市計画史の起源の更新を示唆しうる、興味深い仮説と言える。

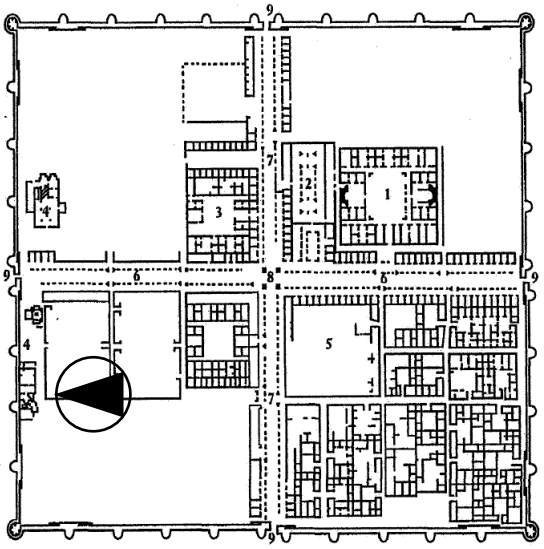
(2)ギリシャ・ローマ遺跡の空間構成の地域特性の抽出
　西アジアに対しては、アレクサンドロス大王の遠征に乗ってヒッポダモス的都市計画が伝播

した。アンティオキアやアパメアでは壮大なスケールで事業化されたが、ダマスクスではこの方針を踏襲しつつも、その規模は小さかったとされる。一方、北アフリカに対しても古代からの地中海交流の一環としてギリシャ・ローマ都市計画が伝搬した。

アルジェリアでは、フェニキア人（カルタゴ）によって創建され、ローマ時代に市して発展した港湾都市ティパザについて、2019 年に実施した現地調査ノートも踏まえた概括を行った。緑豊かな沿岸にあってカルド（南北軸）とデクマヌス（東西軸）が明瞭に認識されるが、特にカルドは旧港湾に直結する形でやや斜めに触れている。神殿、教会、アゴラ、公共浴場、劇場、円形闘技場等の基本施設が配置されており、キリスト教時代以降の墓地は保存状態がよく世界遺産登録の主な理由の一つとなっている。ティパザはアラビア語で「荒廃した都市」を示すように、5 世紀末にかけて衰退したが、近代に入って周辺に市街地が形成された。現在ではアルベール・カミュの記念碑等を含む観光施設が立ち並ぶ町中となっていることがわかった（この他、アルジェリアではジャミラ、イッポーヌについて現地調査を実施した）。

(3)イスラーム期の移行過程分析－アンジャルを事例に

アンジャルの城壁はおおよそ 370×310mのほぼ正方形で、面積は約 11,470 ㎡である。ダマスクスとベイルートのほぼ中間という戦略的な位置にある。真南がキブラ（メッカの方角）となる。必ずしも大きな都市とは言えないが、地下水路のあるカルドとデクマヌスは明瞭な十字型を示している（図 1）。いわゆるローマの施設が多く確認でき、はっきり例外と言えるのはモスクだけである。近郊のローマ遺跡からの石材を多く再利用しており、水の供給もローマの泉を継承していた。都市計画技術をローマの遺産に依存していたという仮説を概ね説明している。



1. 大宮殿　2. モスク　3. 小宮殿
4. 公衆浴場　5. 居住区
6. カルド･マキシムス
7. デクマヌス･マキシムス
8. テトラパイロン　9. 城壁

図 1：アンジャル遺跡プラン(Hillenbrand, R. (1999). Anjar and early Islamic urbanism)

とはいえ、モスクに加えて、大小の宮殿もまた、中央に広い中庭を持つイスラーム建築の特徴に近似しているといえる。後背地における住宅も、整形グリッドの中に収まりながらも、一つの中庭を複数の住宅によって共有しておりむしろ中庭が空間構成の起点のように見える。また、広場やアゴラといったヒッポダモス以来の公共空間が見られないという点は、いわゆるローマ的都市空間からの逸脱であるとも指摘できよう。当然、神殿・教会の類は存在しない。

ヒレンブランドによれば、アンジャルの主な用途は軍事基地または離宮、あるいは傘下の部族集団の入植地であり、住民も一般市民というよりは兵士だった可能性が高いとする。また農地が開墾され、農業生産物の集積と交易市場としても機能したとされる。実際、中庭建築のいくつかがハーン（キャラバンサライ）であったとする説も見られる。

アンジャルは一般住民からなる都市社会を形成していたとは言えないかもしれないが、ヘレニズム基盤を継承しつつも、アラブ＝イスラーム独自の都市施設を導入している。少なくとも、アラブ＝イスラームがヘレニズムの都市空間を劣化させたという指摘が誤りであることは、アンジャルの遺跡が雄弁に物語るのである。なお、2023 年 9 月に現地で観察撮影調査を実施した。

(4)ソヴァジェ仮説の検証に基づく考察

ヘレニズムの都市空間の稠密化とは、ヒッポダモスに起源を持つグリッド・プランが、一千年以上の時間の経過を経て、稠密化し、スークである細街路網へと変容していく過程を指している。この仮説が広まったのは、フランス委任統治期の考古学者ジャン・ソヴァジェによる一連の研究をきっかけとしている。ただし、その重要な論拠となった、細街路網の中に残存していたヘレニズム時代の柱の「発見」は、18 世紀のリチャード・ポコックに遡る。これを受けて、20 世紀初頭（オスマン帝国時代）にヴルティンガーとワツィンガーの二人のドイツ人学者が、旧市街の所々にみられた柱を地図上にプロットしていくことで、柱が規則正しい柱廊空間を構成し、旧市

街中心部の広い範囲に渡ってグリッド・プランによる市街地形成の痕跡が見られると指摘した。続くソヴァジェの仮説は、いわば時間軸を導入し、元々のグリッド・プランが現在の細街路網のように変容していったかを、タイムライン上に示したというものである。

直接の事例としては、ヘレニズム時代のラオディケアを主題としているが、以後、アパメアやパルミラなど、シリアの柱廊都市において検証されてきた。例えば、ロス・バーンズ（本研究でも著書を訳出した）は、この仮説がいまなお重要性が高いことを認めつつ、いくつかの問題提起も行っている。例えば、このような細街路網への変容が、主としてイスラームに入って以後になされたものであるというソヴァジェの議論は批判的に検証されるべきだとする。一見迷路的とも見える細街路網の形成をイスラームに起因するとみなしてしまえば、ムスリムによる都市形成は、無秩序で非合理的であるという「イスラーム都市」論の特徴的な見方に陥ってしまう。バーンズによれば、近年の研究成果は、むしろ変容が既にビザンティン帝国時代に起こっていたこと、従って、稠密化はイスラームに関わる慣例や価値観だけによるものではないこと、が示唆しうるのだという。これはアンジャルの事例を踏まえれば首肯できるところである。

具体的には、ビザンティン帝国にしても成立から数百年を経ており、石造りの舗装はつるつるに摩滅し地肌が出ていた。そうなれば荷馬車も通行できない。柱も倒壊したであろう。帝国の各地にあった石切り場は、標準化された建材の生産の場であったが、帝国辺境における紛争によって弱体化していた時期には生産力が下がった。都市行政もまた不安定であった。更に、この地域特有の大地震が追い打ちをかけた。そうして崩壊した柱廊空間は、荷馬車のいない歩行者向けの空間となったし、倒壊しかけた柱と柱の間をうまく利用しての小店舗が形成されたであろう。それはイスラームとは直接の関係はなかったはずである。そこで改めて検討するなら、二重スークと書かれているあたりは、スークというアラビア語がイスラーム時代以降を示唆するとはいえ、このビザンティ帝国末期の不安定時代のこととみなすべきではないだろうか。個人の商売活動を奨励するイスラームの教えが、個人経営の小店舗群からなる同業者組合としてのスークを形成したのは、より後年においてである。三重化したスークでは、スークの形成にも一定の組織化があったことが認められる。バーンズによれば、その根拠史料が見られるようになるのは、マムルーク朝時代に入ってからのことだという。

つまりスークの多重化には商人による Dwelling Practice が影響したと考えられるのである。

(5)現代の都市計画、文化財保全等における位置づけの検討

現代の都市計画の視点でみるとき、ダマスクスやアレッポにおいて日本の国際協力に基づき策定されてきた都市基本計画の存在は重要である。ダマスクスの 1968 年都市基本計画には、日本人計画家・番匠谷堯二が第二担当者として策定を主導しており、現在でも現役の法定都市計画である。また、アレッポにおいても 1975 年の都市基本計画が、近年まで法定都市計画であった。以後、ダマスクスでは JICA による都市計画協力が行われており、将来的な日本の都市計画技術の応用においても歴史的実績の明確化は重要なことである。

上述のように、1968 年のダマスクスの都市基本計画は、その旧市街計画（主として 9 章）において、「古代都市の再構築」と銘打った、小規模店舗建築の削減による柱廊型都市軸を中心とする古典古代期の都市遺産の顕在化をテーマとするものであった。また、それによって街路拡幅を実現し、当時注目の交通手段であった自動車が旧市街内を行き来できるようにすることも企図されていた。柱廊型都市軸の顕在化と、道路の導入の、どちらが主目的であったかの判断は難しい。その主計画者がソヴァジェと長く考古学分野で協働してきたミシェル・エコシャールであったことは当然であったと思われる。

一方、第二担当者であった番匠谷の計画論は、師である清家清の作風を受け継いだ、可変型計画論であった。その最初の住宅作品である『正方形の家』（東京・目白）は、結婚や子供の自立などといった家族の増減に伴い、パーティションを導入することによって空間構成を変えていくというものである。これは、フランス政府給費研修員としてパリの ATBAT において修行していた当時、ジョルジュ・キャンディリスによって評価され、続いて勤務したアルジェ市役所都市計画局において、ビドンヴィル（スラム）住民のための緊急避難住宅のスタディにおいても用いられている。まさに Dwelling Practice を踏まえた計画論といえる。

これらの点を総括すると、1968 年計画における「古代都市の再構築」計画は、一見、フランス式の都市改造論でありながら、実際には人口過密化への対応としての零細建築物の除去による稠密化空間のシンプル化、正常化であった可能性が考えられる。可変型計画論に基づく空間密度の濃淡の調整の試みであったことが示唆されるのである。その目的であるヘレニズム時代の遺産の顕在化は、現在でも旧市街内においてみられる空間整備方針である。また、旧市街内の観光ルート「古典古代の道」も、ヘレニズム遺産を重視した観光政策である。1968 年計画を都市計画史的視点から一定の再評価をすることは、将来の都市計画の方向性を考える上でも有意義であると考えられる。なお、2023 年 9 月にダマスクス及びハマーで現地調査を実施し、本文献研究の成果を踏まえて発信していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Matsubara Kosuke	４．巻 5
２．論文標題 An examination of the three districts in Algiers by Fernand Pouillon as Moorish architecture: Research on dwelling practice around the “bidonville (shantytown)” project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 2	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW	６．最初と最後の頁 458～473
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/2475-8876.12279	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Alkazei Allam、Matsubara Kosuke	４．巻 22
２．論文標題 The role of reconstruction planning and shop owners’ contribution in the post-war transformation and revival of vitality in Hiroshima Hondori Shotengai	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Asian Architecture and Building Engineering	６．最初と最後の頁 425～451
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13467581.2022.2046587	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hu Jiahui、Matsubara Kosuke	４．巻 23
２．論文標題 Development of French inspired urban architecture with the construction of the Yunnan-Vietnam Railway: a case study of Kunming city based on literature survey	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Journal of Asian Architecture and Building Engineering	６．最初と最後の頁 1～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13467581.2022.2153054	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Matsubara Kosuke	４．巻 4
２．論文標題 Some learnings Gyoji Banshoya acquired from the spatial composition of the ancient shantytown of Mahieddine, in 1950's Algiers: Research on dwelling practice around the “bidonville (shantytown)” project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 1	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW	６．最初と最後の頁 343～355
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/2475-8876.12203	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Matsubara Kosuke	4．巻 56
2．論文標題 Fernand Pouillon’s Involvement in the Urban War Reconstruction for the Old Port of Marseilles	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of the City Planning Institute of Japan	6．最初と最後の頁 1007～1014
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/journalcpij.56.1007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 MATSUBARA Kosuke	4．巻 86
2．論文標題 RESEARCH ON DWELLING PRACTICE AROUND THE “BIDONVILLE (SHANTYTOWN)” PROJECTS IN ALGIERS DURING THE LATE COLONIAL PERIOD, PART 2 : AN EXAMINATION OF THE THREE DISTRICTS IN ALGIERS BY FERNAND POUILLON AS MOORISH ARCHITECTURE	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6．最初と最後の頁 2799～2810
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.86.2799	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 松原康介
2．発表標題 清家清の計画論の「進化型」住宅としての位置づけについて- NHK番組アーカイブス学術利用トライアル調査から-
3．学会等名 2022年度日本建築学会（北海道）学術講演会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Kosuke Matsubara
2．発表標題 The Project for the Reconstitution of Hellenistic Infrastructure as Suggested by the 1968 Master Plan for Damascus
3．学会等名 Tabliz Ivent MA “In-Between”（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 牧野 奈央; 松原 康介
２．発表標題 アルジェリア人からみた仏植民地期カスバの都市空間 -マフード・カッダーシュの報告の分析を通じて-
３．学会等名 日本建築学会学術講演梗概集
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 ロス・バーンズ、松原 康介、前田 修、谷口 陽子、守田 正志、安田 慎	４．発行年 2023年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 528
３．書名 ダマスクス　都市の物語	

１．著者名 ロス・バーンズ、松原 康介、柴田 大輔、藤田 康仁、杉本 悠子、川本 智史	４．発行年 2023年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 368
３．書名 アレッポ　都市の物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

筑波大学研究者総覧
https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000000877
都市文化共生計画研究室HP
http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~matsub/index.html
Open Researcher and Contributor ID(ORCID)
https://orcid.org/0000-0003-4136-1737

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関